

# 虹

三月号

平成23年度  
3月24日(日)  
発行  
担当：佐藤瑞起  
(第49号)

こんにちは。だんだんと日が長くなり、春らしくなってきましたね。

3月10日、11日は、笹塚ファクトリーにて、フェニックス・プロジェクトによる「3.11 1年目の春」が行われました。そのなかで、相馬高校、あさか開成高校、新宿高校が上演をし、2日には東京都内の高校生によるリーディングが上演されました。参加された皆様、お疲れさまでした。また観劇して下さい皆様、ありがとうございました。

相馬高校(相馬市) 「今伝えたいこと」  
あさか開成高校(郡山市) 「この青空は、ほんとの空ってことでいいですか？」  
新宿高校(東京) 「ひたすら、国道6号線。」

3.11 リーディング企画 「3.11 から未来へ 高校生、100文字のメッセージ」

また、<http://phoenixpro.jimdo.com/> に

このフェニックス・プロジェクトに対する  
新宿校生とリーディング企画参加者による  
コメントがあります。ぜひご覧下さい。

三月三十一日は中央地区学年末公演です。  
舞台芸術学院にて行われます。  
中学生・高校生・出演者の保護者・友人・  
OGやOB・学校関係者・高校演劇連盟関係  
者なら誰でも観劇できます。

OSやOB・学校関係者・高校演劇連盟関係  
者なら誰でも観劇できます。

OSやOB・学校関係者・高校演劇連盟関係  
者なら誰でも観劇できます。

## 狂言

今回の特集は「狂言」です。狂言とは、猿楽の滑稽な部分を劇化した最古の喜劇です。能と併せて行われますが、能とは異なり、物まねの要素を含んだ写実的なセリフ劇です。

## 滑稽な笑いの世界

狂言は能とほぼ同じ頃に発生し、セツトで交互に演じられ発展していきました。交互に演じる事によって、能の「幽玄の世界」とは正反対の「笑いの世界」へと観客の心を和ませてくれます。狂言の登場人物は身近な親しみある普通の人々です。殿様や大名も出てきますが、だいたい家来にバカにされたり、ドジだったりします。狂言の主役を演じる人を能と同じく「シテ」と呼び、また、シテの相手役を勤める脇役を「アド」と呼びます。日常的な話し言葉を使い、内容もわかりやすく演じられています。(幽玄=世阿弥によると「ただ美しく柔和なる体」つまり「平安朝的な優美さを持つことで、女性的な美しさ」のことであるが定説はない)

## 祖先は散楽

奈良時代に中国から渡来した「散楽(さんらくがく)」が、平安時代に「猿楽(さるがく)」となり、猿楽本来の笑いの要素がセリフ劇となり、南北朝時代に「狂言」が生まれました。そして能と併せて発展し、能とは全く対照的な、日常的なできごとを笑いを通して表現す

るセリフ劇として庶民の間に広まりました。室町時代の後期に大蔵流「おおくら」・和泉「いずみ」流・鷲「さぎ」流が成立します。現在では和泉流、大蔵流の二流が活動しています。

## 能とは対照的な狂言

能とは違って、一般に面（おもて）は用いず、素顔で演じられます。セリフが主体で、時には激しい動きを見せるなど、演劇に近いものです。ほとんどが、30分くらいの上演時間のもので、能の多くが過去の世界を扱うのに対し、狂言は現実社会の人々が登場人物なので素顔で舞台に立つのが一般的です。面は能面ほど発達せず、神・鬼・精霊・老人・動物等の3種類ほどしかありません。（能は）しかしそれらの面は喜怒哀楽の表情が豊かなものです（通常、狂言師は子供のころに、「靉猿」のサル役デビュー）。

## 狂言の分類

狂言は大きく以下の3種類に分類されます。

### ◆ 別狂言

能「翁」の一部をなす三番叟（さんばそう）。大蔵流では「三番三」と書く）と、その特別演出である風流をいいます。

### ◆ 本狂言

一曲として独立して演じられるもの。通常、狂言という場合はこれをさします。

### ◆ 間狂言（あいきようげん）

単に間（あい）とも。能の一部として演じられるものをいいます。

## 主な登場人物

### ● 太郎冠者

狂言の中のスーパースター的存在。職業としては主人や大名に仕える家来で、曲により小賢しかったり、健気だったり、しっかり者だったり、おろかだったりとさまざまなた性格を持ちます。どんな状況でも生き抜くたくましさや愛嬌に溢れ、一生懸命なほど滑稽に見えるという、狂言そのものを象徴するようなキャラクターです。

### ● 山伏

山野で修行を重ねる仏教の修験者。「野に伏し山に伏し、あるいは岩木を枕とし、難行苦行捨身の行いをするによって、その奇特には、今日の前を

飛ぶ鳥も祈り落とす程の行力」を得たと自称しますが、狂言ではその力を發揮できずに失敗することが多いです。



### 作者感想

無事にフェニックス・プロジェクトが終わりました。今回の公演は今まで以上に落ち着いて、楽しく上演することが出来ました。また、福島の高校生の思いを知ることが出来、前日までテストで練習時間が少なく心配でしたが、とても良かったです。また、リーダーイングの黙禱の時には感動して涙が出そうになりました。

震災から一年。まだ傷が色濃く残っている場所がすぐ近くにあり、苦しんでいる方がたくさんいらっしゃる。私たちに何ができるのか。私たちは援助を与えるのではなく、手を差し伸べるのです。